国語

次の文章を読んで、以下の各問に答えなさい。

「マクドナルド化現象」

ファーストフードビジネスが、1960年代以降、食の多様化や自然食志向、エスニックフードリバイバルなどにさらされながらも、なぜかえってより強大化したのかという問題を考える上で重要な出発点を提供してくれるのは、社会学者のジョージ・リッツァが提唱した「マクドナルド化」という概念である。彼は、マクドナルドに代表されるファーストフードのビジネスモデルは、近代産業社会の究極のビジネスモデルへと上り詰めたと指摘する。

近代産業社会は、効率と収益率を最優先する。A<u>その点、ファーストフードは、コスト削減と売り上げ増加の両面を極限までつき詰めている。</u>メニューを限定し、流れ作業式に瞬時に現物を提供し、セルフサービスやディスポーザブルとテイクアウトを奨励することで、コストは最小化される。加えて、作業がマニュアル化された単純労働に変換されているため、特殊な技能は必要ではなくなり、人件費や従業員教育のコストも下がる。そして、店内には座り心地のいい椅子を置かないことで、客の回転は早まり、収益は最大化されていく。

しかも、速さと低価格が売りのファーストフードは、［ B ］力を発揮する。客は、限られたメニューしか選べず、しかも、個人的な注文をつけることは通常できない。食べたら自分で後片付けをしなくてはいけないし、席数もさほど多くはないのでさっさと食事を済ませないと気まずい雰囲気だ。だが、客はこうした点に文句をつけるわけではない。時間と金の節約は、客にとっても喜ばしい面があるからだ。むしろ客は、限られたメニューをけちもつけずに受け入れ、店側が期待するような、さっさと食べて自分で片付けていくという行動を、自ら率先して取っている。これに今や客の誰も疑問を感じていないわけだが、これは、それだけC<u>従順</u>な消費者として飼いならされたことを意味している。

つまり、ファーストフード店のシステムは、時間と金の節約こそが事業者と消費者の共通の関心事だと割り切ることで、高圧的に強制せずとも、自然と客の行動を店側にとって都合よくコントロールするのに成功したといえる。そこでは、逆に客があたかも金を払ってくれる機械人間のようにベルトコンベアに乗せられていくような感じすらある。これは、消費者側の主体性の喪失を物語っているわけだが、ファーストフードビジネスのすごいところは、D<u>そういう感覚</u>を消費者側には感じさせないようにしておいて、一方では完全に消費者をだしぬいている点なのだ。このように、ファーストフードビジネスが達成したのは、マニュアル化の徹底や単なる収益性の向上だけではない。時間と金の節約を最優先にすれば、高圧的な手法に頼らなくとも消費者を従順にできると実証したことなのだ。

収益を最大化しながら同時に消費者を密かに飼いならすという、経営者にとっては夢のようなこのビジネスモデルが、程度の差こそあれ、様々な領域で模倣されたのは当然の帰結だろう。リッツァのいう「マクドナルド化」した社会では、時間と金の節約に役立つビジネスが奨励される。そこでは、アメリカのロードサイドビジネスに起源を持つ、マニュアル化された収益性の高いビジネスモデルが、分野や国境を超えてデフォルト化し、共通の利害関係の下、消費者は知らず知らずのうちに企業の協力者と化していく。アメリカ発祥のファーストフードが今や世界的巨大企業として君臨している事実は、現代がまさに「マクドナルド化」した世界であることを象徴しているといえよう。

ファーストフードの発展は、発注者や雇用主としての［ E ］力も高める。納入業者はファーストフードの意向を無視できなくなるし、重要な雇用創出源には地域社会も一目置かざるをえない。今やマクドナルドは、アメリカ最大のジャガイモ、牛肉、豚肉購入業者となった。アメリカ人の八人に一人は、生涯のうち一回はマックで働いているとされる。ファーストフードの強大化は、より有利な条件でビジネス展開できる環境を作り出した。

ファーストフード型ビジネスモデルは、こうして立派な商売として認知され、消費者を味方につけた。かつては実現が困難だった、速くかつ低価格という条件を可能にするビジネスモデルは、今や当たり前のこととなった。ファーストフードビジネスを敵に回すことは次第に困難となり、その地位はより盤石になったのだ。

レーガノミクスと格差社会の深刻化

ファーストフードビジネスが強大化した背景には、このビジネスモデルに内在する要因に加えて、外的要因も存在する。それは、1980年代のアメリカに生じた経済的変化と密接に関連している。

1980年代のアメリカは、ベトナム戦争への膨大な戦費の出費や70年代のオイルショックで傾いた経済を立て直そうとした。その際、共和党のレーガン政権は、それまでのアメリカの経済政策とはF<u>一線を画す</u>方針を掲げた。これは、レーガノミクスと呼ばれている。

19世紀後半の金ぴか時代が巨大企業の出現に伴う市場の独占や富のG<u>ヘンザイ</u>という事態を招いたことから、その後のアメリカは、私企業と公共の利益をどう調和させるかを強く意識してきた。つまり、極端な格差社会に舞い戻らないことが新たな目標となったのである。それゆえ、基本的にはアメリカは、独占禁止法を盾に企業の横暴を規制しつつ、雇用を促進して貧富の差を縮めるという路線をとり、自由放任主義的な市場経済H<u>一辺倒</u>の姿勢とは距離を置いてきた。ところが、こうした政策の下では、連邦政府による企業に対する規制や干渉が強まるとともに、雇用創出や貧富の格差を是正する必要上、公共事業や福祉政策に必要な予算を確保するための税金が高くなりやすい。

そこで、レーガンは、思い切ってJ<u>この路線</u>を見直すことでアメリカ経済を活性化しようとした。すなわち、規制緩和と減税を同時に行い、新たなビジネスへの投資を促進しようとしたのだ。これがうまくいけば、新たな産業の業績が伸びて、いずれは税収も十分に回復すると考えられた。もっとも、減税をする以上、福祉に頼る貧困層がしわ寄せを受け、仮に一時的にせよ格差が開く懸念はあった。だがこれも、新規産業の恩恵が国民各層に届けば、極端な格差社会は回避できるという計算だった。

［ K ］、思惑は完全には当たらなかった。当時はまだ冷戦の最中で軍事費の支出がかさんでいた。また、減税で手元に余ったお金が消費に過剰に回ってしまったために、輸入が増えて、貿易赤字を押し上げた。減税によってただでさえ政府は赤字に転落するリスクがあったが、ここにアメリカは財政赤字と貿易赤字という双子の赤字を抱えることになったのである。

こうした状況は、規制緩和と減税という大胆な手法によっても、思ったほどアメリカ企業の業績がすぐには劇的に回復しなかったことを物語っている。しかし、一方では、アメリカの経済構造は着実に変化も遂げていた。それは、収益性の高いハイテク産業へのシフトであった。規制緩和と減税の恩恵を利用して、ハイテク技術を伴う付加価値の高い新規分野を開拓できれば、時間はかかるかもしれないが将来は高収益を上げられる。こうしてその後90年代にかけて飛躍的に発展したのが、コンピュータや半導体、携帯電話やインターネットといったＩＴ業界であった。この種のハイテク分野では高学歴の技術者や専門職が多く必要とされるため、そうした人々の雇用や収入は増えたといえる。

しかし、新規分野が成長できた一方で、それまでの基幹産業だった鉄鋼や自動車などは、新興国の追い上げと輸出攻勢にさらされ、人件費抑制を迫られた。そこで、工場を労働力の安い海外に移転することで生産コストを切り詰めようとしたが、結果的にこれは国内の労働市場の空洞化を招き、失業者を増やすことにもなった。基幹産業に従事していた中産階級の人々は、生活水準を下げざるをえなくなっていく。

他方、すでに貧困にあえいでいた層にとっては、レーガノミクスは打撃となった。減税による福祉予算や教育予算の削減で、ますます経済的に追い詰められてしまったからだ。貧困ライン以下が国民の一割を超える中、これらの人々には低価格のファーストフードしか事実上食事の選択肢がなくなってしまった。

このように、90年代以降のアメリカでは、新規産業が順調に成長して景気を引っ張る一方、L既存の産業に従事していた中産階級の多くが没落し、貧困層はさらに追い詰められるという、豊かになる人々と没落する人々の二極化傾向に拍車がかかるようになる。結果的にレーガノミクスは、アメリカを豊かにはしたが、格差社会の再来となりかねないリスクも顕在化させたといえる。今やアメリカでは、国の富の八割を所得上位の一割の人々が握っている。

こうした格差社会の到来は、安さを売り物にするファーストフードにとって新たなビジネスチャンスとなる。大勢が経済的に没落すれば、安い食べ物に対する需要はかえって増えるからだ。こうしてファーストフードは、財布の紐が固くなってより安い商品を求めるようになった人々を顧客として取り込んでいった。

アメリカのテレビを見ていると、ファーストフードのコマーシャルを頻繁に見かける。そのどれもが強調するのは、値段の安さと量の多さだ。割安感と満腹感に訴えることで、増加傾向にある低所得者層を確実に吸収しようとしているのである。

ビジネスチャンスとしての格差社会

実際、ファーストフードは80年代以降、確実に店舗を増やしてきた（マクドナルドだけで世界に約三万店ある）。しかし、格差社会の到来に伴って、潜在的な顧客が増えたことだけが、ファーストフードのさらなる発展の原因ではない。

あくまでも［ M ］が生命線である以上、人件費の抑制という課題はファーストフード業界にとっても同じだった。工場が閉鎖されて失業した労働者を雇うことも選択肢としてはありえた。だが、かつて中産階級だった人々の中には、ファーストフード店のような低賃金単純労働を進んでしたいと考える人は少なかった。それゆえ、［ N ］が、ファーストフードがこのビジネスチャンスをものにできるかどうかの鍵となった。その時、この業界が目をつけたのが、移民労働力であった。

とりわけアメリカの隣国メキシコをはじめとする中南米諸国は、アメリカとの経済格差が著しく、アメリカの低賃金労働であっても、自国では十分家族を養っていけた。しかも、マニュアル化された作業であるファーストフード店で働くには、高度な英語力や専門的知識も必要ない。それゆえ、アメリカに出稼ぎに行きたい人々と、低賃金労働の担い手を探していたファーストフード業界の思惑が一致する形で、ファーストフードを代表格とするアメリカの低賃金労働市場に、メキシコを中心とする中南米からの大量の移民労働力が流れ込む事態が起こる。今日のヒスパニックの増大の背景を考える際、80年代以降のアメリカの［ P ］を無視することはできない。

しかも、移民の中には、非合法なルートで入国してきた人々も少なくなかったため、立場の弱い労働者も少なくない。雇用する側からすれば格好のターゲットだ。ティーンエイジャーのアルバイトとなれば、なおさらである。

このように、ファーストフード業界が、食文化革命の抵抗をものともせず、かえって現在に至るまで強大化してきている背景には、このビジネスモデルが世界のあちこちで受け入れられ、人々の抵抗感を取り除いてきたことに加えて、レーガノミクス以降の経済的変化が関係していた。没落する中産階級や増大する貧困層という潜在的顧客が増加したところへ、より低コストを実現できる移民労働力が供給される事態が重なった。こうしてファーストフード業界は、顧客拡大と人件費削減の両面で、［ Q ］という新たなビジネスチャンスをものにしたのである。

ファーストフードビジネスが80年代以降かえって強大化してしまったことは、別の局面にも波紋を投げかけている。いまやファーストフードは、没落する中産階級や、福祉をカットされた貧困層にとってある種の［ R ］的な存在へと変貌してきている。格差社会になくてはならない存在となってしまったのだ。ファーストフードビジネスは、格差社会を利用してきたのみならず、今やその中枢機能を担っているともいえる。

子どもの頃からファーストフード漬けの人々が再生産されていく状況も、ファーストフード業界には有利に作用する。そうした人々にとっては、それが自分にとって最も身近な味となるからだ。実際、ファーストフードビジネス側もS<u>この点</u>を意識し、次世代の顧客を囲い込むため、キャラクターの導入など、子どもをターゲットにしてきている形跡も認められる。

T<u>格差社会の到来とともに、強大化したファーストフードビジネスに対峙することは、かつてのように食の画一化に抵抗するという単純な話ではなくなってきている。ファーストフードの影響力を跳ね返すことはいっそう困難になり始めたのである。</u>

（鈴木透著『食の実験場アメリカ　ファーストフード帝国のゆくえ』中公新書より。原文の一部を改変している）

問１　文中の下線部Ａ「その点、ファーストフードは、コスト削減と売り上げ増加の両面を極限までつき詰めている」とある。ファーストフードがコスト削減と売り上げ増加のために行っていることとして文中に述べられていないものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

a　メニューを限定し、流れ作業式に瞬時に現物を提供する。
b　店内に座り心地のいい椅子を置かない。
c　作業をマニュアル化された単純労働に変換する。
d　セルフサービス、ディスポーザブル、テイクアウトを奨励する。
e　特殊な技能を持つ従業員を教育する。

問２　文中の空欄［　B　］に入る語句として最も適切なものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

a　店が従業員を都合よく教育する
b　消費者を店側の協力者に変換する
c　時間と金の節約を消費者に強制する
d　マクドナルド化という概念を普及させる
e　高圧的な手法を用いて成功する

問３　文中の下線部Ｃ「従順」の対義語として適切でないものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

a　強情
b　反抗
c　頑強
d　強靭
e　頑迷

問４　文中の下線部Ｄ「そういう感覚」が示す内容として最も適切なものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

a　さっさと食事を済ませないと気まずいという感覚
b　店側にとって都合よくコントロールされているという感覚
c　時間と金の節約が事業者と消費者の共通の関心事だという感覚
d　ファーストフード店のメニューは豊富ではないという感覚
e　店にけちや文句をつけたりしてはいけないという感覚

問５　文中の空欄［　E　］に入る語句として最も適切なものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

a　遠心
b　原動
c　応用
d　影響
e　発信

問６　文中の下線部Ｆ「一線を画す」の意味として最も適切なものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

a　はっきり区別する
b　一歩先を行く
c　前提の異なる
d　守るべきことを破る
e　相容れない

問７　文中の下線部Ｇ「ヘンザイ」の「ヘン」を漢字で書いたときに、その漢字と同じ漢字を含むものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

a　ヘンピな場所にある。
b　早急にヘンキンします。
c　フヘン的に価値がある。
d　委員会をサイヘンする。
e　年をとるとヘンクツになる。

問８　文中の下線部Ｈ「一辺倒」の意味として最も適切なものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

a　固定観念にとらわれていること
b　うわべだけの形であること
c　ありきたりであること
d　ある一方だけに傾倒すること
e　聞く耳を持たないこと

問9　文中の下線部J「この路線」の内容として適切でないものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

a　私企業と公共の利益を調和させる。
b　市場の独占を防ぐため企業に対する規制を強める。
c　収益性の高い新たなビジネスへの投資を促進する。
d　高い税金を課し公共事業や福祉政策に必要な予算を確保する。
e　雇用を促進して貧富の差を縮める。

問10　文中の空欄 K に入る語句として最も適切なものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

a　なかでも
b　それゆえ
c　とりわけ
d　ところが
e　そのうえ

問11　文中の下線部L「既存の産業」が示す内容として最も適切なものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

a　鉄鋼や自動車産業
b　ハイテク産業
c　ファーストフードビジネス
d　軍事産業
e　公共事業

問12　文中の空欄 M に入る語句として最も適切なものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

a　低コスト
b　アルバイト
c　新興国
d　マニュアル
e　貧困ライン

問13　文中の空欄 N に入る語句として最も適切なものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

a　安い食べ物に対する需要をいくら増やせるか
b　どのように失業者を説得するか
c　ファーストフードの魅力をいかにして伝えるか
d　どうすれば顧客の財布の紐をゆるめられるか
e　いかに安い労働力を確保するか

問14　文中の空欄 P に入る語句として最も適切なものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

a　食の多様化や自然食志向、エスニックフードリバイバルの流れ
b　経済構造の変化に伴う低賃金単純労働市場の動向
c　ハイテク分野で高学歴な技術者や専門職が多く必要とされた事実
d　ファーストフードビジネスが割安感と満足感を売りにして得た新たな顧客層
e　極端な格差社会における高度な英語力や専門的知識の必要性

問15　文中の空欄 Q に入る語句として最も適切なものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

a　格差社会の到来
b　移民労働力の獲得
c　食文化革命
d　規制緩和と減税
e　没落した中産階級

問16　文中の空欄 R に入る語句として最も適切なものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

a　象徴
b　模範
c　命綱
d　草分け
e　空気

問17　文中の下線部S「この点」が示す内容として最も適切なものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

a　子どもの興味をひきつけるには、新メニューよりもキャラクターの導入の方が効果を発揮する。
b　ファーストフードが提供する食べ物は値段が安くて量が多いため、子どもから大人まで満足させられる。
c　子どもと親が一緒になって仲良く店を訪れてくれることが今後のファーストフードの課題である。
d　子どもの頃からファーストフードの味に慣れ親しんだ人は、大人になっても店に通い続けてくれる。
e　ファーストフードを好む人々は、没落する中産階級や福祉をカットされた貧困層に多い。

問18　文中の下線部Tに「格差社会の到来とともに、強大化したファーストフードビジネスに対峙することは、かつてのように食の画一化に抵抗するという単純な話ではなくなってきている。ファーストフードの影響力を跳ね返すことはいっそう困難になり始めたのである」とある。このように筆者が述べる理由を、句読点を含めて50字以内で説明しなさい。解答は、解答用紙の記述問題解答記入欄に書きなさい。